

# そだちのねっこ

～乳幼児期の遊びより～



【 「ぶっぶ～!!」 「(ここ通れるかな～?!)」 ～『やってみよう!』が学びの芽～ 】

10月9日(木)1歳児の遊んでいる様子を見てきました。子どもたちは親しんでいる体操の音楽が聞こえてくると、保育者の真似をして、「どンドン」「ぐるぐる」などの声を出しながら体操したり、保育者が歌う季節の歌を聞いたりロズさんだりしていました。保育室前のホールには、柔らかい素材で作られたハードルや、マットの山、透明のトンネル、フラフープやコンビカーなどの、安全面に考慮された遊び環境が整えられていました。運動会を経験し、「体を動かすことが楽しい!」と思い始めている子どもたちが「やってみたくなる」環境であると思いました。



数人の子どもたちがホールでコンビカーに乗って、気になる場所へ出かけていきました。そんな中、A 児は、マットの山をよじ登り降りしたり、フラフープを見つけ中に入って、「ぶっぶー!!」とホールを1周走ったりしていました。再び、コンビカーに乗ると、ハードルを置いている隙間へそのまま向かっていきました。はじめは、勢いよく走りながら入ったり出たりしていました。何度も繰り返した後、今度はゆっくりと慎重に前後に動かし、ハンドルを細かに切りながらコンビカーを動かしました。ハードルの幅ギリギリにコンビカーを寄せられるか、(ここ通れるかな～?!)とA 児なりに考えているように思いました。A 児が足の親指に力を込めて、ゆっくりゆっくりコンビカーを動かそうとしている姿や、前から通るだけでなく、バックしながら通れるかな、と試している姿がとても印象的でした。

保育者は、子どもに背を向けずに、常に全体が見える位置から、子どもの様子を見渡せるように意識しています。そして、子どもたちと遊びを楽しみながら、子どもの『こうしたい』という思いを受け取り、環境を再構成したり、応答的にかかわったりします。時には、意図的に発達を促せる、その時期に合った玩具も取り入れます。コンビカーがその一つです。乗り物を自分で動かせる楽しさ、スピード感を味わえることに加えて、コンビカーのハンドル操作では、手足の協調性を養い、足で蹴ることで足腰の筋力の発達を促します。今回のエピソードでは、保育者が意図していない遊び方の中で、A 児が自ら何度も試している姿から、学びの芽を見取ることができました。柔らかい素材で作られたハードルは、跨いだり、ジャンプしたりして遊ぶとイメージした教材でしたが、子どもが違う遊び方をしている姿を、保育者も何を楽しんでいる?何を思っている?とあたたかく見守ったことで生まれた学びの芽だったと思いました。

ハードルの幅ギリギリに寄せる中で、コンビカーや自分の体の大きさを確認している A 児が、また新たな「隙間」を見つけて、(ここ通れるかな～?!)と試すことを楽しめるような環境は何かいいかなと考える、今後の遊び環境の展開が楽しみになりました。子どものワクワク感を楽しむために、保育者もワクワク感をもって環境を整え、かかわっていく。また「やってみたくなる」遊び環境の中で、子どもたちが主体的に色々なことを知り・驚き・感じる経験を、積み重ねていくことが大切だと思いました。